HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アリストテレス『トピカ』A巻における弁証術研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	北郷, 彩
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12379号
Issue Date	2016-09-26
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/63421
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Aya_Kitago_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　北　郷　彩

主査　教　授　千葉　惠
審査委員　副査　教　授　山田友幸
副査　准教授　近藤智彦

学位論文題名
アリストテレス『トピカ』Ａ巻における弁証術研究

申請者北郷彩氏はアリストテレスの『トピカ』（主にＡ巻）のテクスト構成に即し解釈を提示しつつ議論を展開している。アリストテレスはアカデメイアにおける問答による探求（例えば、「正義とは何であるか」の探求）の公式的な方法である「問答法・ディアレクティケー(*dialektikē*)」が持つ諸アポリアを克服すべく、問答の手続きを明確化し思考を前進させる方法として自らの「弁証術(*dialektikē*)」を考案した。申請者は今日では言語哲学や Critical Thinking の研究領域に属するであろうアリストテレスの言論の吟味の技術を、矛盾律に基づき「いかに問うべきか」また「いかに語るべきか」の規範を提示する「ロギケー・形式言論構築術(*logikē*)」のもとに析出する。このロギケーという技術は弁証術の方法を定めるものであり弁証術的実践とは判別される。氏は論文の構想をこう提示する。「適切な言論の方法とは何かと我々が問うことがしばしば困難であるのは、或る適切さを実現する手段に迷うからではなく、そもそも何を言論形式における適切さとみなすべきかについての考察が必要とされるからである」。氏はメタ理論的観点からＡ巻の分析を介して適切な議論の基礎づけをめぐる方法論を析出し、その技術が弁証術の実践において共有見解に基づき賛成と反対の論拠を提示する弁証術的推論の形成に適用されていると論じる。氏はその推論を構成する「命題」と「問題」（命題Ｐに対して「Ｐか否か」という形で諾否による応答を要求する表現）とその構成要素となるプレディカビリア（「述語づけ可能なもの」）の分析からアリストテレスの弁証術形成を追跡している。

北郷彩氏は『トピカ』Ａ巻におけるアリストテレスの弁証術の方法論の分析を遂行するにあたり、現実世界の在り方の探求を一旦括弧にいれ、例えば多義性の十七種の分類の議論における「名前に即した述定の類」に基づく吟味に見られるように、言語次元において「いかに語るべきか」という規範的言語使用の枠組みを明確に提示している。その枠のなかで氏は言論の検証吟味の方法、技術を追跡している。北郷氏は賛成と反対(pro and con)の弁証術的推論の形成にいたるその様々な構成要素、命題・問題、述定そしてプレディカビリアそれぞれの特徴と機能を整合的なものとしてかつ体系的なものとして提示することに成功している。Ａ巻の詳細で説得的な分析の論述内容は高く評価されるべきである。ここでの氏の重要な貢献はプレディカビリア導出の手法を明確に示したことにある。氏はプレディカビリアの四種が「何であるか」の問いに対する網羅的かつ相互排他的な応答であることを二つの基準のもとに演繹している。一つの基準は（A と呼ぶ）「事物に固有であるか否か（主語述語互換されるか否か）」であり、もう一つの基準は（B と呼ぶ）「事物の「何であるか」に述語となるか否か」である。その肯定を+、否定を-で表現すると、次のような排他的な分類が得られる。本質：A+B+、固有性：A+B-、類：A-B+、付帯性：A-B-。この業績は既に公表されている(『哲学』43(2007))。先行研究として Wagner & Rapp により実質上の排他的分類は提示されてはいたが(2004)、その導出の道筋を示しえたことは学界に対する大きな貢献であり、この成果は既に一定の評価をえている。

なお、いくつかの問題点が指摘されている。アリストテレスがアカデメイアにおける弁証術を自らの流儀において刷新したことが強調されるが、それまでのプラトン等における状況がいかなるものであったかの検討と叙述が十全には伴っておらず、説得性にやや欠けることが指摘された。また

テクストの翻訳ならびに読解にいくつかの問題があることが指摘された。とはいえ、それらは今後の研究において補われるであろうこと、さらにギリシャ語テクストの正確な読解は終わりなき作業であることを鑑みるとき、今後のさらなる成長こそが期待される。